

養蚕まつり

旧曆三月下旬、養蚕がさかんな頃、各部落とも花馬をだし盛大に行い、各家では「まゆダング」をつくり神仏に供え豊作を祈願したが、今日では養蚕の衰退とともに行われなくなった。

八十八夜

昔は「八十八夜の別かれ霜」といって、五月上旬になるとこの日をさかいに、苗代準備そして粃まきや一般野菜の種子をまいたといわれている。

田植休み

六月下旬より七月はじめにかけて行う田植えが終了すると、どの部落でも「田植休み」といって休日(遊び日)としている。この日はどの家でもごちそうをつくる。現在では田植え時期が早くなり(六月中旬)、また「田植休み」といっても、昔のような考えは少なくなった。

虫送り

田植がすみ七月上旬になると多くの部落で、虫送りの行事が行われる。「ウンカ送り」ともいい、水田の害虫の発生を防ぐ行事である。

「実盛さま」、「風鳥」などを藁でつくり、かね、太鼓を打ちならし子どもが隊列をつくり、水田をまわり歩く。

雨乞いとお湿り祭

七、八月ごろ、日照りがつづき農作物に被害があるようなとき、部落ではめぐみの雨があるようにと、村中総出で氏神様にお参りをする。そして慈雨があれば、一斉に「お湿り祭り」といって祝った。

厄日除れ

二十十日、二百二十日に大風がなく農作物の被害がなかった年は、「無難祝い」ともいって氏神様にお礼参りをした。二十十日頃、竹の竿の先に鎌をつけ庭の木に南向きに結びつけ台風が来ないように、来ても被害が少ないようにと祈った。鎌立て・風祭り

豊年祭

一〇月中旬、秋祭りが行われる、氏神様での神事を中心に行われ豊作を祈願する、一年中で一番の遊び日である。

秋上げ

秋の収穫が完了した頃(一二月上旬)、収穫を祝って休日がある。すなわち秋上げの日である。各家では「ポタモチ」を神様にお供えし、収穫を感謝する。昔は、どの家も親類など秋の農作業の手伝いをうけた家には「ポタモチ」を配った。

第四節 村 役

農家の集落を昔は「瀬古」(組とも)とよび、数瀬古を併せて小字といい、この小字を併せて大字を形成していた。こうして成立した大字が「村(ムラ)」であった。

瀬古はおたがいに日常生活の中がかたいつき合いをし普請(建前)、葬式などの時は手伝いをした。

村には区長、惣代、各種の年番の役がおかれていた。区長は、大字あるいは小字を代表し、推薦によって選出されるところが多く、一年で交替した。惣代は小字の代表であり、年番(年行事)は瀬古ごとに選び、種々の行事の計画、あるいは触れ(連絡)を行うとともに、行事進行の中心となっていた。こうした年番には、宮年番、寺年番などもあった。

これらの係り(役目)は、それぞれの書類や道具を管理し村寄り(總會)の日をもつてつぎの係りに引きつぎ交替した。交替は概ね四月一日と定めていたところが多い。

また小字には、宿元(やどもと)といつて各年中の諸行事を行うための場所、あるいは年番が集まり、行事の相談、準備などをする家を交替できめていたところが多く、宿元になると昔は誇りであるとともに、かなりの負担もあつたといわれる。

すなわち宿元になると、部屋の修理、たたみの張り替え、座ぶとんの新調などがさかんに行われ、諸行事が立派に遂行できるように注意を払った。

農村の年齢集団 この時代のおもな年齢集団は若衆組で、どの部落にも組織されていた。この若衆組は明治時代の末期から大正初期のころは若連中とよんでいたが、大正時代中期になって青年会というようになつた。

青年会は各家のあとつぎが一三―一五歳になると加入することにきめられており、二五歳で脱退するところが多かった。

青年会のおもな仕事は、部落内の年中行事に参加することで、氏神の祭礼、お神送り、迎えなどのおこもり、また農道の草刈り、川ざらえなど奉仕的な活動もした。

一方部落によつては、教養、娯樂なども青年会が中心になつて行事をした。

また信仰的集團としての役割りをつとめる青年会もあり、年間二・三回お説教、お仏事を開いた。

このほか年齢集團としては、子ども組などがあり、祭礼、ウシカ送り、天皇祭りなど多くの年中行事に参加していた。子ども組は、おおむね八歳から一三歳までの子どもが加入するところが多かつた。